

Veritas NetBackup™ for SQLite 管理者ガイド

Windows および Linux

リリース 8.3

VERITAS™

Veritas NetBackup™ for SQLite 管理者ガイド

最終更新日: 2020-09-21

法的通知と登録商標

Copyright © 2020 Veritas Technologies LLC. All rights reserved.

Veritas、Veritas ロゴ、および NetBackup は、Veritas Technologies LLC または関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。その他の会社名、製品名は各社の登録商標または商標です。

この製品には、Veritas 社がサードパーティへの帰属を示す必要があるサードパーティ製ソフトウェア（「サードパーティ製プログラム」）が含まれる場合があります。サードパーティプログラムの一部は、オープンソースまたはフリーソフトウェアライセンスで提供されます。本ソフトウェアに含まれる本使用許諾契約は、オープンソースまたはフリーソフトウェアライセンスでお客様が有する権利または義務を変更しないものとします。この Veritas 製品に付属するサードパーティの法的通知文書は次の場所です。

<https://www.veritas.com/about/legal/license-agreements>

本書に記載されている製品は、その使用、コピー、頒布、逆コンパイルおよびリバースエンジニアリングを制限するライセンスに基づいて頒布されます。からの書面による許可なく本書を複製することはできません。

本書は、現状のまま提供されるものであり、その商品性、特定目的への適合性、または不侵害の暗黙的な保証を含む、明示的あるいは暗黙的な条件、表明、および保証はすべて免責されるものとします。ただし、これらの免責が法的に無効であるとされる場合を除きます。およびその関連会社は、本書の提供、パフォーマンスまたは使用に関連する付随的または間接的損害に対して、一切責任を負わないものとします。本書に記載の情報は、予告なく変更される場合があります。

ライセンスソフトウェアおよび文書は、FAR 12.212 に定義される商用コンピュータソフトウェアと見なされ、Veritas がオンプレミスまたはホスト型サービスとして提供するかを問わず、必要に応じて FAR 52.227-19 「商用コンピュータソフトウェア - 制限される権利 (Commercial Computer Software - Restricted Rights)」、DFARS 227.7202 「商用コンピュータソフトウェアおよび商用コンピュータソフトウェア文書 (Commercial Computer Software and Commercial Computer Software Documentation)」、およびそれらの後継の規制に定める制限される権利の対象となります。米国政府によるライセンス対象ソフトウェアおよび資料の使用、修正、複製のリリース、実演、表示または開示は、本使用許諾契約の条項に従ってのみ行われるものとします。

2625 Augustine Drive
Santa Clara, CA 95054

<http://www.veritas.com>

テクニカルサポート

テクニカルサポートはグローバルにサポートセンターを管理しています。すべてのサポートサービスは、サポート契約と現在のエンタープライズテクニカルサポートポリシーに応じて提供されます。サポート内容およびテクニカルサポートの利用方法に関する情報については、次の Web サイトにアクセスしてください。

<https://www.veritas.com/support>

次の URL で Veritas Account の情報を管理できます。

<https://my.veritas.com>

現在のサポート契約についてご不明な点がある場合は、次に示すお住まいの地域のサポート契約管理チームに電子メールでお問い合わせください。

世界共通 (日本を除く)

CustomerCare@veritas.com

日本

CustomerCare_Japan@veritas.com

マニュアル

マニュアルの最新バージョンがあることを確認してください。各マニュアルには、2 ページ目に最終更新日が記載されています。最新のマニュアルは、Veritas の Web サイトで入手できます。

<https://sort.veritas.com/documents>

マニュアルに対するご意見

お客様のご意見は弊社の財産です。改善点のご指摘やマニュアルの誤謬脱漏などの報告をお願いします。その際には、マニュアルのタイトル、バージョン、章タイトル、セクションタイトルも合わせてご報告ください。ご意見は次のアドレスに送信してください。

NB.docs@veritas.com

次の Veritas コミュニティサイトでマニュアルの情報を参照したり、質問したりすることもできます。

<http://www.veritas.com/community/>

Veritas Services and Operations Readiness Tools (SORT)

Veritas SORT (Service and Operations Readiness Tools) は、特定の時間がかかる管理タスクを自動化および簡素化するための情報とツールを提供する Web サイトです。製品によって異なりますが、SORT はインストールとアップグレードの準備、データセンターにおけるリスクの識別、および運用効率の向上を支援します。SORT がお客様の製品に提供できるサービスとツールについては、次のデータシートを参照してください。

https://sort.veritas.com/data/support/SORT_Data_Sheet.pdf

目次

第 1 章	Veritas NetBackup for SQLite エージェントの概要	6
	NetBackup for SQLite エージェントについて	6
	NetBackup for SQLite Agent がサポートする機能	7
	NetBackup for SQLite Agent パッケージ	7
	NetBackup for SQLite Agent のライセンスについて	8
	NetBackup for SQLite Agent のマニュアル	8
第 2 章	Veritas NetBackup for SQLite エージェントのインストール	9
	NetBackup for SQLite Agent のインストールの計画	9
	オペレーティングシステムとプラットフォームの確認	10
	NetBackup for SQLite Agent のインストールの前提条件	10
	NetBackup for SQLite Agent のインストール後の要件	11
	NetBackup for SQLite Agent パッケージの説明	11
	NetBackup for SQLite Agent のインストール	12
	NetBackup for SQLite Agent のアンインストール	13
第 3 章	NetBackup for SQLite の構成	14
	nbsqlite.conf 構成ファイル	14
	DataStore ポリシーを使用した SQLite バックアップの構成	16
第 4 章	NetBackup for SQLite のバックアップおよびリストア	18
	SQLite データベースのバックアップについて	18
	SQLite バックアップの実行	19
	バックアップ情報の検証	21
	バックアップの問い合わせ	21
	NetBackup カタログファイルからのバックアップ情報の削除	22
	SQLite バックアップのリストアについて	22
	SQLite バックアップのリストアの実行	24
	リダイレクトリストア	24
	ディザスタリカバリ	25

第 5 章	NetBackup for SQLite のトラブルシューティング	26
	NetBackup for SQLite Agent 使用時のエラーのトラブルシューティング	26
付録 A	NetBackup for SQLite のコマンドおよび規則	31
	NetBackup for SQLite Agent コマンドについて	31
	NetBackup for SQLite Agent コマンドの表記規則について	32
付録 B	NetBackup for SQLite のコマンド	33
	nbsqlite -o backup	34
	nbsqlite -o restore	35
	nbsqlite -o query	36
	nbsqlite -o delete	37
索引	38

Veritas NetBackup for SQLite エージェントの概要

この章では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup for SQLite エージェントについて](#)
- [NetBackup for SQLite Agent がサポートする機能](#)
- [NetBackup for SQLite Agent パッケージ](#)
- [NetBackup for SQLite Agent のライセンスについて](#)
- [NetBackup for SQLite Agent のマニュアル](#)

NetBackup for SQLite エージェントについて

NetBackup for SQLite Agent は、NetBackup の機能を拡張したもので、SQLite データベースのバックアップとリストアを行います。このエージェントは、NetBackup クライアントにあり、スタンドアロン設定での操作をサポートします。このエージェントは、SQLite バージョン 3.10.0 以降をサポートします。

メモ: SQLite エージェントと NetBackup が、正常に行われたバックアップ操作およびリストア操作のバージョンと同じであることを確認します。

このエージェントは、さらに以下もサポートします。

- バックアップの検証。
- バックアップとリストアの問い合わせ。
- カタログファイルからのバックアップ情報の削除
- リストアのリダイレクト。

NetBackup for SQLite のワークフロー

エージェントは、`nbsqlite.conf` ファイルからパラメータを読み込んでから操作を開始します。`nbsqlite.conf` ファイルには、対応する操作を実行する前に設定する必要があります。パラメータが含まれています。

p.14 の「[nbsqlite.conf 構成ファイル](#)」を参照してください。

エージェントは、単一のデータベースファイルがあるボリュームのスナップショットを作成します。Windows 用のボリュームシャドウコピーサービス (VSS)、または Linux 用の LVM (Logical Volume Manager) は、SQLite データベースのスナップショットを作成します。

エージェントは、スナップショットをマウントしてファイルを XBSA データオブジェクトにコピーしてから、NetBackup XBSA インターフェースにそれを送信します。NetBackup XBSA インターフェースは、NetBackup メディアサーバーが管理する、マウントされたメディアまたはディスクストレージにこのデータを書き込みます。

LVM が構成されていない Linux オペレーティングシステムの場合、エージェントはデータベースファイルをファイルシステムから直接コピーします。

NetBackup for SQLite Agent がサポートする機能

表 1-1 に、エージェントがサポートする機能を示します。

表 1-1 エージェントでサポートされる機能

機能	説明
バックアップ	エージェントは、SQLite データベースの単一ファイルベースのバックアップをサポートします。
リストア	エージェントは、SQLite バックアップファイルのリストアをサポートします。
リダイレクトリストア	エージェントは、代替 NetBackup クライアントへの SQLite バックアップファイルのリストアをサポートします。

NetBackup for SQLite Agent パッケージ

エージェントは、`NBSQLiteAgent_8.2.zip` にパッケージ化されており、my.veritas.com サイトから利用可能です。

パッケージには、次のプラットフォームファイルが含まれています。

- (Windows) `NBSQLiteAgent_8.2_AMD64/`
- (Linux RHEL) `NBSQLiteAgent_8.2_linuxR_x86/`
- (Linux SLES) `NBSQLiteAgent_8.2_linuxS_x86/`

NetBackup for SQLite Agent のライセンスについて

NetBackup for SQLite Agent は NetBackup クライアントソフトウェアにインストールされ、NetBackup とは別にライセンス付与されるオプションではありません。NetBackup for SQLite Agent は、Application and Database License Pack の有効なライセンスをお持ちのお客様にご利用いただけます。一般的に、NetBackup for SQLite Agent のライセンス付与は、サポートされるデータベースエージェントの既存のキャパシティライセンスモデルに従います。

NetBackup for SQLite Agent のマニュアル

NetBackup for SQLite Agent のマニュアルは、次の URL から入手できます。

www.veritas.com/support/en_US/article.DOC5332

Veritas NetBackup for SQLite エージェントのインストール

この章では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup for SQLite Agent のインストールの計画](#)
- [オペレーティングシステムとプラットフォームの確認](#)
- [NetBackup for SQLite Agent のインストールの前提条件](#)
- [NetBackup for SQLite Agent のインストール後の要件](#)
- [NetBackup for SQLite Agent パッケージの説明](#)
- [NetBackup for SQLite Agent のインストール](#)
- [NetBackup for SQLite Agent のアンインストール](#)

NetBackup for SQLite Agent のインストールの計画

表 2-1 は、エージェントのインストールに必須の計画手順を示しています。

表 2-1 エージェントをインストールするための一般的な手順

手順	処理
手順 1	オペレーティングシステムを確認します。 詳しくは、p.10 の「 オペレーティングシステムとプラットフォームの確認 」を参照してください。を参照してください。

手順	処理
手順 2	エージェントをインストールする前に、前提条件を確認します。 詳しくは、p.10 の「 NetBackup for SQLite Agent のインストールの前提条件 」を参照してください。を参照してください。
手順 3	オペレーティングシステムに、エージェントをインストールします。 詳しくは、p.12 の「 NetBackup for SQLite Agent のインストール 」を参照してください。を参照してください。

オペレーティングシステムとプラットフォームの確認

ご使用のオペレーティングシステムまたはプラットフォームで **NetBackup for SQLite Agent** がサポートされていることを確認してください。

エージェントは、次のプラットフォームでの操作をサポートします。

- Red Hat Enterprise Linux (RHEL) 6.8 以降
- Red Hat Enterprise Linux (RHEL) 7.0 以降
- SUSE Enterprise Linux Server 11 SP4 以降
- SUSE Enterprise Linux Server 12 以降
- Microsoft Windows Server 2008 R2 以降
- Microsoft Windows 8.1 以降

NetBackup for SQLite Agent のインストールの前提条件

インストールする前に、次の前提条件を満たしていることを確認します。

- **NetBackup 8.2** 以降がインストールされ、マスターサーバー、メディアサーバー、クライアントで稼働中である。
- **SQLite エージェント** と **NetBackup** のバージョンが同じであることを確認します。
NetBackup を新しいバージョンにアップグレードする場合は、エージェントのバージョンもアップグレードする必要があります。
- **SQLite データベース** がインストールされ、クライアントで稼働中である。

NetBackup for SQLite Agent のインストール後の要件

インストール後に次を実行します。

- (Windows) NetBackup for SQLite Agent を、管理者権限で実行するように構成します。
- (Windows) NetBackup の bin ディレクトリを PATH ユーザー環境変数に追加します。
- (Linux) nbsqlite.conf ファイルが存在しない場合は、デフォルトの構成ファイルを作成します。詳しくは、p.14 の「[nbsqlite.conf 構成ファイル](#)」を参照してください。を参照してください。
- (Linux) エージェントのユーザーがスーパーユーザーまたはスーパーユーザー権限を持つユーザーであることを確認します。

メモ: root アクセス権がないユーザーには、NBSQLiteAgent ディレクトリに対する読み取り、書き込み、実行の権限が必要です。

NetBackup for SQLite Agent パッケージの説明

エージェントは、NBSQLiteAgent_8.2.zip ファイルにパッケージ化されており、my.veritas.com サイトから利用可能です。

パッケージファイルには、次のプラットフォームファイルが含まれています。

- (Windows) NBSQLiteAgent_8.2_AMD64/
- (Linux RHEL) NBSQLiteAgent_8.2_linuxR_x86/
- (Linux SUSE) NBSQLiteAgent_8.2_linuxS_x86/

(Windows) NBSQLiteAgent_8.2_AMD64/ には次のファイルが含まれています。

- NBSQLiteAgent_8.2_AMD64/README.txt
- NBSQLiteAgent_8.2_AMD64/cab1.cab
- NBSQLiteAgent_8.2_AMD64/Setup.exe
- NBSQLiteAgent_8.2_AMD64/NBSQLiteAgent.msi

(Linux RHEL) NBSQLiteAgent_8.2_linuxR_x86/ には次のファイルが含まれています。

- VRTSnbsqliteagent.rpm

(Linux SUSE) NBSQLiteAgent_8.2_linuxS_x86/ には次のファイルが含まれています。

- VRTSnbsqliteagent.rpm

エージェントをインストールする際は、ベリタスの使用許諾契約に同意すると、エージェントの正常なインストールを続行できます。

デフォルトでは、エージェントは次の場所にインストールされます。

- (Windows) C:\Program Files\VERITAS\NBSQLiteAgent
- (Linux RHEL および SUSE) /usr/NBSQLiteAgent/

NetBackup for SQLite Agent のインストール

エージェントをインストールするには

- 1 NBSQLiteAgent_8.2.zip ファイルをダウンロードします。
- 2 オペレーティングシステムに適用するファイルを抽出します。
 - (Windows) NBSQLite_8.2_AMD64/
 - (Linux RHEL) NBSQLiteAgent_8.2_linuxR_x86/
 - (Linux SUSE) NBSQLiteAgent_8.2_linuxS_x86/
- 3 オペレーティングシステムに適用するファイルを実行します。
 - (Windows) NBSQLiteAgent_8.2_AMD64/Setup.exe
 - (Linux RHEL) NBSQLiteAgent_8.2_linuxR_x86/VRTSnbsqliteagent.rpm
rpm -ivh VRTSnbsqliteagent.rpm コマンドを使用します。
 - (Linux SUSE) NBSQLiteAgent_8.2_linuxS_x86/VRTSnbsqliteagent.rpm
rpm -ivh VRTSnbsqliteagent.rpm コマンドを使用します。
- 4 y と入力して、ベリタスの使用許諾契約に同意します。エージェントはデフォルトの場所にインストールされます。

メモ: 使用許諾契約書に自動的に同意 (サイレントインストール) するには、次の内容を含む /tmp/AgentInstallAnswer.conf ファイルを作成します。

Yes - 使用許諾契約書に同意する場合

No - 使用許諾契約書に拒否する場合

NetBackup for SQLite Agent のアンインストール

エージェントをアンインストールするには

- 1 (Windows) [コントロールパネル]で、Veritas NetBackup SQLiteAgent_8.2 ファイルを右クリックし、[アンインストール]を選択してエージェントをアンインストールします。
- 2 (Linux RHEL または SUSE) アンインストールするには、次のコマンドを実行します。

```
rpm -e VRTSnbsqliteagent
```

NetBackup for SQLite の構成

この章では以下の項目について説明しています。

- [nbsqlite.conf](#) 構成ファイル
- [DataStore](#) ポリシーを使用した [SQLite](#) バックアップの構成

nbsqlite.conf 構成ファイル

構成ファイル (`nbsqlite.conf`) には、各操作について指定する必要があるパラメータが含まれています。事前定義済みの設定が含まれ、クライアント上に配置されます。`nbsqlite.conf` ファイルでパラメータを構成するか、コマンドラインでそれらを指定します。コマンドラインのパラメータは、`nbsqlite.conf` ファイルよりも優先されます。

パラメータを指定しない場合は、デフォルト値が優先されます。

`nbsqlite.conf` ファイルを使用すると、操作を実行するたびにパラメータを指定する必要がなくなります。

`nbsqlite.conf` ファイルは次の場所にあります。

- (Windows)
`C:\Program Files\Veritas\NBSQLiteAgent\nbsqlite.conf`
- (Linux RHEL および SUSE) `/usr/NBSQLiteAgent/nbsqlite.conf`

nbsqlite 構成ファイルの作成

NetBackup 8.2 以降、RHEL または SUSE でのエージェントのインストール時に、デフォルトでは `nbsqlite.conf` ファイルが作成されません。RPM インストーラは、インストール先ディレクトリ `/usr/NBSQLiteAgent/` に既存の任意のファイルを単に上書きするため、既存の構成ファイルは上書きされません。

nbsqlite.conf ファイルが存在しない場合は、オプションを指定せずにバックアップユーティリティコマンドを実行して、ファイルを作成できます。たとえば、./nbsqlite コマンドを実行します。このコマンドは、デフォルトの nbsqlite.conf ファイルを作成します。

表 3-1 に操作のパラメータを示します。

表 3-1 nbsqlite.conf ファイル

パラメータ (Parameters)	説明	次に対する必須パラメータ	デフォルト値
SQLITE_DB_PATH	SQLite データベースパスを構成します。	バックアップ	このパラメータのデフォルト値はありません。
MASTER_SERVER_NAME	nbsqlite 操作に NetBackup マスターサーバーを指定します。	バックアップ、リストア、問い合わせ、および削除を実行します。	このパラメータのデフォルト値はありません。
POLICY_NAME	DataStore のポリシー名を指定します。	バックアップ	このパラメータのデフォルト値はありません。
SCHEDULE_NAME	DataStore ポリシーを作成する際に構成したバックアップスケジュールを特定します。	バックアップ	このパラメータのデフォルト値はありません。
CLIENT_NAME	エージェントを持つ NetBackup クライアントを定義します。	リダイレクトリストアと問い合わせ	このパラメータを設定しない場合は、NetBackup マスターサーバーがデフォルト値になります。
SNAPSHOT_SIZE	(Linux) LVM スナップショットのスナップショットサイズを、キロバイト (KB)、メガバイト (MB)、またはギガバイト (GB) で指定します。	LVM バックアップ	このパラメータを設定しない場合は、MB がデフォルト値になります。
DB_BACKUP_ID	バックアップイメージ名を表します。このパラメータは、バックアップイメージ名を使用して指定するバックアップファイルを構成します。	バックアップファイルの削除およびリストアするには、バックアップイメージ名を指定します。	このパラメータのデフォルト値はありません。
SQLITE_TARGET_DIRECTORY	バックアップのリストア先ディレクトリを指定します。	リストア	このパラメータのデフォルト値はありません。

パラメータ (Parameters)	説明	次に対する必須パラメータ	デフォルト値
NBSQLITE_LOG_LEVEL	<p>NBSQLITE_LOG_LEVEL パラメータを使用すると、nbsqlite ログのログレベルを設定できます。特定のログレベルでは、そのレベル以下のすべての詳細が記録されます。</p> <p>nbsqlite のデバッグログには、次の詳細レベルが含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 1 – ERROR: 修正の必要がある状態 (構成エラーなど)。 ■ 2 – WARN: エラーではないが、特別な処理を必要とする可能性がある状態。 ■ 3 – INFO: 情報メッセージ ■ 4 – DEBUG: トラブルシューティングに使用されるデバッグのメッセージ。 	<p>ログレベルは、エラーをトラブルシューティングする際に、アクセスする情報の量を制御するのに役立ちます。</p>	<p>この値を設定しない場合は、ログレベル 1 がデフォルト値になります。</p>
NBSQLITE_LOG_SIZE	<p>nbsqlite のログサイズを MB 単位で指定します。ログは、指定したサイズに達すると既存のログ情報を上書きします。</p>	<p>値は、ログに書き込むイベントに応じて指定できます。</p>	<p>このパラメータを設定しない場合は、10 MB がデフォルト値になります。</p>

DataStore ポリシーを使用した SQLite バックアップの構成

エージェントは、属性、スケジュール、クライアントリスト、バックアップ対象を定義するために、DataStore ポリシーをサポートします。

DataStore ポリシーを使用して **SQLite** データベースバックアップを構成するには

- 1 マスターサーバーに管理者 (Windows) または root ユーザー (Linux) としてログオンします。
- 2 [NetBackup 管理コンソール (NetBackup Administration Console)] で、[NetBackup の管理 (NetBackup Management)]、[ポリシー (Policies)] の順にクリックします。
- 3 [すべてのポリシー (All Policies)] ペインで、[すべてのポリシーの概略 (Summary of All Policies)] を右クリックして、[新しいポリシー (New Policy)] をクリックします。

- 4 [新しいポリシーの追加 (Add a Policy)]ダイアログボックスで、ポリシーの一意の名前を入力します。
- 5 [ポリシーの変更 (Change Policy)]ダイアログボックスで、[ポリシー形式 (Policy Type)]ドロップダウンリストから[DataStore ポリシー (DataStore Policy)]を選択します。
- 6 [ポリシーストレージ (Policy Storage)]ドロップダウンリストで、ストレージのディスクベースのストレージユニットを選択します。
- 7 スケジュール形式を選択するには、[スケジュール (Schedules)]タブで[OK]をクリックして、[アプリケーションバックアップ (Application Backup)]スケジュール形式を選択します。

メモ: XBSA フレームワークは、[アプリケーションバックアップ (Application Backup)]スケジュール形式のみをサポートします。

- 8 [クライアント (Clients)]タブで[新規 (New)]をクリックして、NetBackup for SQLite Agent を持つ NetBackup クライアントを追加します。
- 9 [クライアントの追加 (Add Client)]画面で[新規 (New)]をクリックし、[クライアント名 (Client Name)]フィールドにクライアントの名前を入力します。
- 10 NetBackup 管理コンソールで、[NetBackup の管理 (NetBackup Management)]、[ポリシー (Policies)]の順にクリックして既存のポリシーリストのポリシーを表示します。
- 11 バックアップを実行する前に、nbsqlite.conf ファイルの設定を確認します。
- 12 詳しくは、p.14 の「[nbsqlite.conf 構成ファイル](#)」を参照してください。を参照してください。

メモ: SQLite エージェントと NetBackup が、正常に行われたバックアップ操作およびリストア操作のバージョンと同じであることを確認します。

NetBackup for SQLite の バックアップおよびリストア

この章では以下の項目について説明しています。

- [SQLite データベースのバックアップについて](#)
- [SQLite バックアップの実行](#)
- [バックアップ情報の検証](#)
- [バックアップの問い合わせ](#)
- [NetBackup カタログファイルからのバックアップ情報の削除](#)
- [SQLite バックアップのリストアについて](#)
- [SQLite バックアップのリストアの実行](#)
- [リダイレクトリストア](#)
- [ディザスタリカバリ](#)

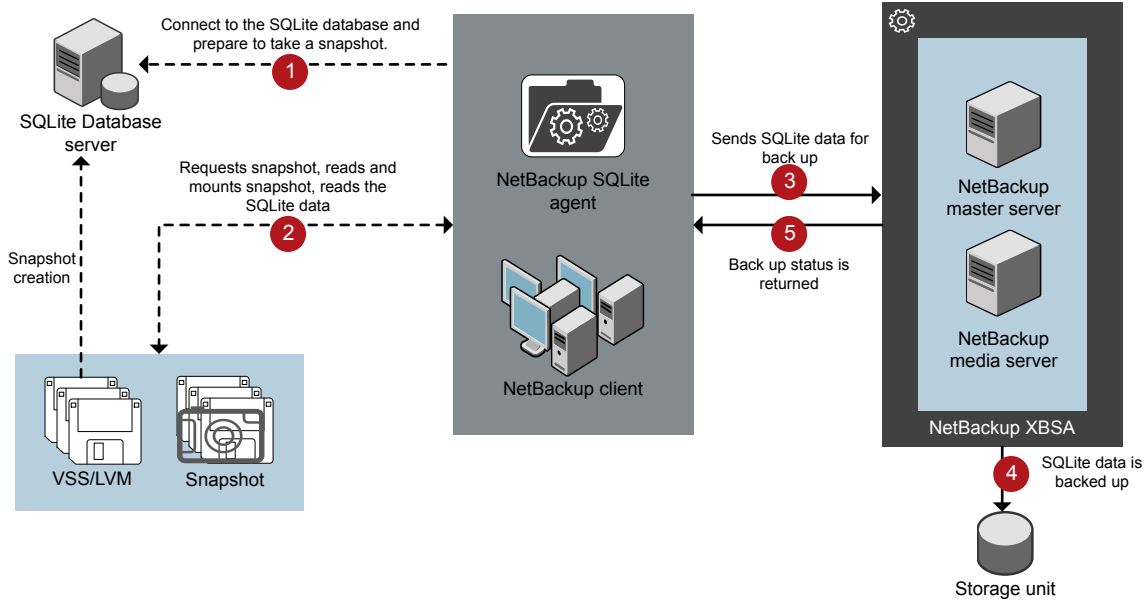
SQLite データベースのバックアップについて

`nbsqlite -o backup` コマンドは、`-S`、`-P`、`-d`、`-s` の必須パラメータを使用して、バックアップ操作を開始します。パラメータ `-z` は、Linux LVM を構成したシステムの必須パラメータです。

これらのパラメータを `nbsqlite.conf` ファイルで構成するか、`nbsqlite` コマンドラインで指定します。優先されるのは、コマンドラインで指定したパラメータです。

メモ: SQLite エージェントと NetBackup が、正常に行われたバックアップ操作およびリストア操作のバージョンと同じであることを確認します。

図 4-1 NetBackup for SQLite のバックアップのワークフロー



NetBackup for SQLite のバックアップのワークフロー

バックアップの開始時、エージェントはスナップショットを作成し、スナップショットをマウントし、XBSA データオブジェクトにファイルをコピーします。その後エージェントは、NetBackup XBSA インターフェースにファイルを送信します。

NetBackup XBSA インターフェースは、NetBackup メディアサーバーが管理する、マウントされたメディアまたはディスクストレージにこのデータを書き込みます。

コマンドプロンプトには、バックアップの正常な完了状態が表示されます。アクティビティモニターには、バックアップジョブの状態も表示されます。

SQLite バックアップの実行

前提条件

バックアップを実行する前に、次の前提条件を満たす必要があります。

- SQLite エージェントと NetBackup のバージョンが同じであることを確認します。NetBackup を新しいバージョンにアップグレードする場合は、エージェントのバージョンもアップグレードする必要があります。
- ユーザーに管理者 (Windows) または root (Linux) のアクセス権があることを確認します。
- (Windows) ユーザー変数パスに NetBackup¥bin ディレクトリを設定します。
- NetBackup 管理コンソールから DataStore ポリシーを構成します。
- (LVM) ボリュームグループ内にスナップショット用の十分な空き領域があることを確認した上で、nbsqlite.conf ファイルまたはコマンドラインで、スナップショットのサイズを設定します。

メモ: スナップショットのサイズが、バックアップするファイルのサイズの 110% であることを確認します。

- nbsqlite.conf ファイルで次のパラメータを設定します。
 - SQLITE_DB_PATH
 - MASTER_SERVER_NAME
 - POLICY_NAME
 - SCHEDULE_NAME
 - (Linux) SNAPSHOT_SIZE

バックアップを実行するには

1 nbsqlite.conf ファイルまたは nbsqlite コマンドラインでパラメータを構成します。

2 次のコマンドを実行します。

```
nbsqlite -o backup
-S master_server_name
-P policy_name
-s schedule_name
(Linux) -z snapshot_size
-d sqlitedb_db_path
```

メモ: SQLite エージェントと NetBackup が、正常に行われたバックアップ操作およびリストア操作のバージョンと同じであることを確認します。

NetBackup からの SQLite バックアップのスケジュール設定

SQLite バックアップのスケジュール設定は、DataStore ポリシーを使用してバックアップスクリプトを呼び出すことで、NetBackup 管理コンソールから実行できます。

詳しくは、https://www.veritas.com/support/en_US/article.100041699 を参照してください。

バックアップ情報の検証

バックアップが成功した後、次のコマンドを使用して、バックアップを一覧表示してバックアップ情報を確認できます。

```
nbsqlite -o query
```

バックアップの問い合わせ

nbsqlite -o query コマンドは、指定したオプションに従ってバックアップファイルを一覧表示します。nbsqlite.conf ファイルからこれらのパラメータを構成するか、nbsqlite コマンドラインを使用してパラメータを指定できます。

パラメータ -s は必須パラメータです。代わりに、別のクライアントとポリシーを定義する -c および -p オプションを使用して、バックアップを問い合わせることもできます。

デフォルトでは、NetBackup は nbsqlite.conf ファイルに構成した値を使用します。

問い合わせを実行する前に、nbsqlite.conf ファイルで次のパラメータを設定するか、コマンドラインで指定します。

- CLIENT_NAME
- POLICY_NAME
- MASTER_SERVER_NAME

バックアップを問い合わせるには

- 1 nbsqlite.conf ファイルまたは nbsqlite コマンドラインでパラメータを構成します。
- 2 次のコマンドを実行します。

```
nbsqlite -o query -S master_server_name [-C ClientA] [-P policy_name]
```

たとえば、クライアント ClientA からバックアップを問い合わせるには、次のコマンドを実行します。

```
nbsqlite -o query -S master_server_name [-C ClientA]
```

たとえば、ポリシー名 `policy_name` を使用してバックアップをリストするには、次のコマンドを実行します。

```
nbsqlite -o query -S master_server_name [-P policy_name]
```

たとえば、ポリシー名 `policy_name` を使用してクライアント `ClientA` からバックアップを問い合わせるには、次のコマンドを実行します。

```
nbsqlite -o query -S master_server_name [-C ClientA] [-P policy_name]
```

NetBackup カタログファイルからのバックアップ情報の削除

削除用の `nbsqlite` コマンドは、カタログファイルからバックアップ情報を削除しますが、バックアップファイルは NetBackup メディアサーバーに保持します。パラメータ `-s` および `-id` は、必須パラメータです。

前提条件

バックアップを削除する前に、`nbsqlite.conf` ファイルで次のパラメータを設定するか、コマンドラインでそれらを指定します。

- `DB_BACKUP_ID`
- `MASTER_SERVER_NAME`

バックアップを削除するには

- 1 `nbsqlite.conf` ファイルでパラメータを構成するか、コマンドラインでそれらを指定します。
- 2 次のコマンドを実行します。

```
nbsqlite -o delete -S master_server_name -id db_backup_image_name
```

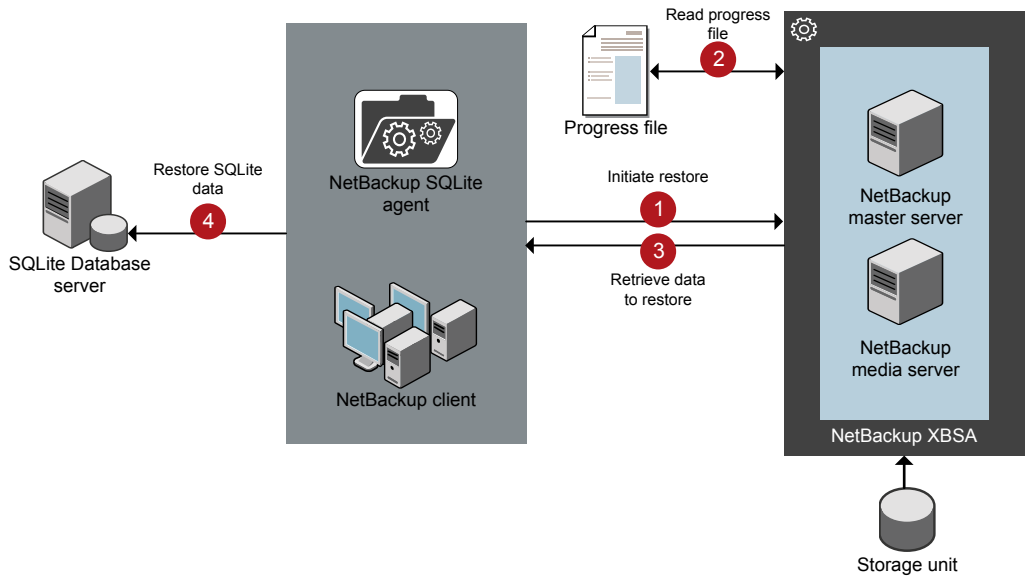
SQLite バックアップのリストアについて

リストア用の `nbsqlite -o restore` コマンドは、`-s` および `-t` の必須パラメータを使用してリストア操作を開始します。パラメータ `-id` および `-c` はオプションのパラメータです。

パラメータ `-id` は、指定したバックアップイメージ名を使用してバックアップをリストアします。パラメータ `-c` は、指定したクライアントにあるすべてのバックアップを一覧表示します。クライアントを指定しない場合は、NetBackup マスターサーバーがデフォルト値になります。

メモ: SQLite エージェントと NetBackup が、正常に行われたバックアップ操作およびリストア操作のバージョンと同じであることを確認します。

図 4-2 NetBackup for SQLite のリストアのワークフロー



NetBackup for SQLite のリストアのワークフロー

リストアの開始時、エージェントはコマンドライン引数を読み取って `nbsqlite.conf` 構成ファイルを解析します。エージェントはその後、NetBackup XBSA インターフェースを介し、指定したパラメータに基づいてバックアップを取得します。

NetBackup XBSA インターフェースは進捗ファイルを読み取って SQLite バックアップファイルを受信し、それらをターゲットディレクトリにリストアします。

コマンドプロンプトには、リストアの正常な完了状態が示されます。アクティビティモニターにも、リストアジョブの状態が表示されます。

SQLite バックアップのリストアの実行

前提条件

リストアを実行する前に、次の前提条件を満たす必要があります。

- SQLite エージェントと NetBackup のバージョンが同じであることを確認します。
NetBackup を新しいバージョンにアップグレードする場合は、エージェントのバージョンもアップグレードする必要があります。
- ユーザーに管理者 (Windows) または root (Linux) のアクセス権があることを確認します。
- (LVM ユーザー) データログとログディレクトリが、論理ボリューム上にあることを確認します。
- nbsqlite.conf ファイルで次のパラメータを設定します。
 - CLIENT_NAME
 - DB_BACKUP_ID
 - TARGET_DIRECTORY
 - MASTER_SERVER_NAME

バックアップをリストアするには

- 1 nbsqlite.conf ファイルでパラメータを構成するか、コマンドラインでそれらを指定します。
- 2 次のコマンドを実行します。

```
nbsqlite -o restore -S master_server_name -t target_directory  
[-id db_backup_image_name] [-C client_name]
```

リダイレクトリストア

リダイレクトリストアでは、最初のバックアップを実行したクライアントとは別のクライアントに、バックアップファイルをリストアできます。新しい場所には別のホストや別のファイルパスを指定できるほか、別のリダイレクトリストア名を使用することもできます。別のホストにリストアをリダイレクトするには、install_path¥NetBackup¥db¥altnames ディレクトリにターゲットクライアント名を含めます。

メモ: SQLite エージェントと NetBackup が、正常に行われたバックアップ操作およびリストア操作のバージョンと同じであることを確認します。

リダイレクトリストアの実行

代替ホストへリストアをリダイレクトする方法

- 1 ホストとして **NetBackup** クライアント名を指定し、リストアをリダイレクトするディレクトリとして **SQLite** ターゲットディレクトリを指定して、`nbsqlite.conf` ファイルを更新します。
- 2 **NetBackup** マスターサーバーで、リダイレクトリストアの実行権限を付与するホストに対して `altnames` ディレクトリを作成します。たとえば、別のホストからのリストアを行う権限を **Host B** に付与するには、次のファイルを作成します。
 - (Windows) `install_path¥NetBackup¥db¥altnames¥HostB`
 - (Linux RHEL および SLES) `/usr/opensv/netbackup/db/altnames/HostB`
- 3 `altnames` ディレクトリに、要求元クライアントがリストアを要求するファイルが存在するクライアントの名前を追加します。たとえば、**Host A** からリストアをリダイレクトする権限を **Host B** に付与するには、**Host B** のファイルに **Host A** を追加します。
- 4 次のコマンドを実行します。

```
nbsqlite -o restore -S master_server_name -t target_directory -id db_backup_image_name [-C client_name]
```
- 5 リダイレクトリストアが正常に実行されたら、マスターサーバーとクライアントで行った変更を元に戻します。

ディザスタリカバリ

ディザスタリカバリは、災害時のデータ損失に備えてデータの回復を計画することです。エージェントは、ディザスタリカバリ戦略としてリダイレクトリストアをサポートします。

詳しくは、p.24 の「[リダイレクトリストア](#)」を参照してください。を参照してください。

NetBackup for SQLite のトラブルシューティング

この章では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup for SQLite Agent 使用時のエラーのトラブルシューティング](#)

NetBackup for SQLite Agent 使用時のエラーのトラブルシューティング

問題を解決するための一般的なガイドライン

[表 5-1](#) に、エージェントの使用中に発生する可能性がある問題を解決するのに役立つ、一般的な手順を示します。

表 5-1 エラーを解決するための一般的な手順

手順	操作	処理
手順 1	エラーメッセージの確認.	通常、エラーメッセージは、適切に行われなかった処理を示しています。コマンドラインにエラーメッセージが表示されなくても、問題が発生している疑いがある場合、ログやレポートを確認します。これらに、問題を直接示すエラーメッセージが含まれている場合があります。ログとレポートは、トラブルシューティングに不可欠な手段です。

手順	操作	処理
手順 2	問題発生時に実行していた操作の確認。	次について質問します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 試行された操作。 ■ 使用した方法。 ■ 使用していたサーバープラットフォームおよびオペレーティングシステムの種類。 ■ マスターサーバーとメディアサーバーのどちらで問題が発生したか(サイトでマスターサーバーとメディアサーバーの両方が使用されている場合)。 ■ クライアントの種類(クライアントが関連する場合)。 ■ 過去にその操作が正常に実行されたことがあるかどうか。正常に実行されたことがある場合、現在との相違点。 ■ Service Pack のバージョン。 ■ 最新の、特に NetBackup を使用する際に必要な修正が行われたオペレーティングシステムソフトウェアを使用しているかどうか。 ■ デバイスのファームウェアのバージョン。公式のデバイス互換性リストに示されているバージョン以上かどうか。
手順 3	すべての情報の記録。	重要になる可能性がある情報を入手します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ NetBackup のログ。 ■ NetBackup for SQLite ログに固有のログ。 ■ NetBackup XBSA に固有のログ。
手順 4	問題の修正。	問題を特定した後、情報を使用して問題を修正します。
手順 5	テクニカルサポートに連絡してください	エラーを解決できない場合は、テクニカルサポートにお問い合わせください。

ログを使用したエラーのトラブルシューティング

エラーのトラブルシューティングを行うには、NetBackup のログ、NetBackup for SQLite Agent のログ、および NetBackup XBSA のログを参照してください。これらのログは次の場所にあります。

NetBackup のログは次の場所にあります。

- `install_path¥NetBackup¥logs¥bprd`
- `install_path¥NetBackup¥logs¥bpcd`
- `install_path¥NetBackup¥logs¥user_ops¥dbext¥logs`

bprd と bpcd のログファイルを有効にする必要があります。詳しくは、『NetBackup トラブルシューティングガイド』を参照してください。

NetBackup for SQLite Agent に固有のログは次の場所にあります。

- `install_path\nbsqlite.log`

NetBackup XBSA に固有のログは次の場所にあります。

- `<NetBackup_install_path>/netbackup/logs/exten_client`

NetBackup のエラーのトラブルシューティングについては、『Veritas NetBackup トラブルシューティングガイド』および『Veritas NetBackup コマンドリファレンスガイド』を参照してください。

NetBackup for SQLite Agent エラーのトラブルシューティング

表 5-2 は、操作の実行中に発生するエラーと、問題のトラブルシューティング方法の一覧を示します。

表 5-2 NetBackup for SQLite エラーのトラブルシューティング

エラー	説明	解決方法
nbsqlite のバックアップが次のエラーで失敗します。 <i>xbsa.dll</i> をロードできません (<i>Unable to load xbsa.dll</i>)	ユーザー環境変数パスが NetBackup の bin ディレクトリに更新されていない場合、nbsqlite のバックアップが失敗します。	nbsqlite のバックアップを正常に実行するには <ul style="list-style-type: none"> ■ ユーザー環境変数パスを NetBackup_install_path/bin に更新します。
nbsqlite のバックアップが状態コード 7648 で失敗します。	安全な接続のためのホスト検証が失敗すると、バックアップが失敗する場合があります。 しばらくしてからバックアップ操作が終了し、ジョブの状態が nbsqlite コマンドプロンプトに表示されます。	有効なマスターサーバー名とホスト名を構成していることを確認してください。
nbsqlite のバックアップが次のエラーで失敗します。 <i>XBSA</i> を開始できませんでした (<i>XBSA initiation failed</i>)	nbsqlite.conf ファイルが必須パラメータで更新されていない場合、nbsqlite のバックアップが失敗します。	バックアップを正常に実行するには <ul style="list-style-type: none"> ■ 有効なマスターサーバー名、ポリシー名、スケジュール形式を、nbsqlite.conf ファイルで、またはコマンドラインから構成します。 ■ nbsqlite エージェントと NetBackup マスターサーバーとの間で通信エラーがないかどうかを確認します。詳しくは、『NetBackup 管理者ガイド』を参照してください。
(Windows) VSS スナップショットの作成に失敗しました (<i>VSS snapshot creation failed</i>)	nbsqlite 操作を実行する権限をユーザーが持っていない場合、nbsqlite のバックアップが失敗することがあります。	管理者モードで <code>cmd.exe</code> を実行します。

エラー	説明	解決方法
<p>nbsqlite のリストア操作を実行しても、ターゲットの NetBackup クライアントからデータをリストアできません。</p>	<p>nbsqlite.conf ファイルが NetBackup のクライアント名とターゲットディレクトリで更新されていない場合、nbsqlite のリストアが失敗します。</p>	<p>正常にリストアするには</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ リストアを NetBackup ソースクライアントから開始します。 ■ nbsqlite.conf ファイルで、NetBackup のクライアント名とターゲットディレクトリのパラメータを設定します。
<p>nbsqlite のバックアップが次のエラーで失敗します。</p> <p>(Linux) LVM のスナップショット作成中にエラーが発生しました (Error creating LVM snapshot)</p>	<p>ボリュームグループにスナップショット用の十分な容量がない場合、nbsqlite のバックアップが失敗することがあります。</p>	<p>ボリュームグループの容量を確認するには、次のコマンドを使用します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 \$vgs コマンドによりボリュームグループの詳細が表示されます。 2 適切なスナップショットサイズで nbsqlite.conf ファイルを更新します。スナップショットは、バックアップファイルのサイズと同等以上のサイズでなければなりません。
<p>正常なバックアップ後のエラーメッセージ:</p> <pre><volume_group>/<snapshot_name> 0 / 4096 (29393616896) 後の読み取りエラー: 入力エラーまたは出力エラー。 (<volume_group>/<snapshot_name> Read failure after 0 of 4096 at 29393616896: input or output error.)</pre> <p>または</p> <pre><volume_group>/<snapshot_name> 0 / 4096 (4096) 後の読み取りエラー: 入力エラーまたは出力エラー。 (<volume_group>/<snapshot_name>: read failure after 0 of 4096 at 4096: input or output error.)</pre>	<p>ボリュームグループにスナップショットが含まれる場合に、nbsqlite のバックアップからこれらのエラーが返されます。バックアップを再度実行する前に、スナップショットをリストしてから削除できます。</p>	<p>スナップショットを削除するには</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 既存のスナップショットを一覧表示するには、次のコマンドを実行します。 \$lvs コマンドによりスナップショットの詳細が表示されます。 2 スナップショットを削除するには、次のコマンドを実行します。 \$ lvremove -f <volume_group>/<snapshot_name>

エラー	説明	解決方法
<p>Linux (LVM) の nbsqlite バックアップが次のエラーで失敗します。</p> <p>スナップショットのマウント解除中にエラーが発生しました - デバイスまたはリソースがビジー状態です <i>(Error unmounting the snapshot-Device or resource busy)</i></p> <p>または</p> <p><i>snapshot-sqlitesnap_<timestamp></i> の削除中にエラーが発生しました <i>(Error removing the snapshot-sqlitesnap_<timestamp>)</i></p>	<p>スナップショットやデバイスをマウント解除しようとしたとき、または既存のスナップショットを削除するときに、nbsqlite のバックアップが失敗します。</p>	<p>スナップショットをマウント解除するには</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 次のコマンドを使用して、マウントされているすべてのファイルシステムをリストします。 <code>\$ mount-l</code> 2 スナップショットがまだある場合は、次のコマンドを実行します。 <code>\$unmount<mount_directory></code> メモ: このディレクトリは <code>/mnt/<snapshot_name></code> に作成されません。スナップショットの接頭辞名は <code>sqlitesnap</code> です。 3 スナップショットを手動で削除するには、次のコマンドを実行します。 <code>lvremove -f <volume_group>/<snapshot_name></code>
<p>RHEL または SUSE でエージェントをインストールした後、nbsqlite.conf ファイルが見つかりません。</p>	<p>NetBackup 8.2 以降、RHEL または SUSE でのエージェントのインストール時に、デフォルトでは nbsqlite.conf ファイルが作成されません。RPM インストーラは、インストール先ディレクトリ <code>/usr/NBSQLiteAgent/</code> に既存の任意のファイルを単に上書きするため、既存の構成ファイルは上書きされません。</p>	<p>nbsqlite.conf ファイルが存在しない場合は、オプションを指定せずにバックアップユーティリティコマンドを実行して、ファイルを作成できます。たとえば、<code>./nbsqlite</code> コマンドを実行します。このコマンドは、デフォルトの nbsqlite.conf ファイルを作成します。</p>

NetBackup for SQLite のコマンドおよび規則

この付録では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup for SQLite Agent コマンドについて](#)
- [NetBackup for SQLite Agent コマンドの表記規則について](#)

NetBackup for SQLite Agent コマンドについて

このセクションでは、`nbsqlite` 操作の実行に利用可能なコマンド、オプション、パラメータについて説明します。コマンドそれぞれの操作の簡単な説明、必須パラメータ、オプションパラメータが含まれています。エージェントは、このドキュメントで説明するコマンド、オプション、およびパラメータのみをサポートしています。

`nbsqlite.conf` ファイルを使用すると、操作を実行するたびにパラメータを指定する必要がなくなります。

以下を確認します。

- `nbsqlite.conf` ファイルまたは `nbsqlite` コマンドラインでパラメータを設定します。コマンドラインで設定したパラメータは、`nbsqlite.conf` ファイルよりも優先されます。
- 操作形式 (`-o`) は、`nbsqlite` コマンドラインに設定します。
- その他のパラメータや、それぞれの操作に対応するオプションは、`nbsqlite` コマンドラインまたは `nbsqlite.conf` ファイルに設定します。

NetBackup for SQLite Agent コマンドの表記規則について

このドキュメントのエージェント固有のコマンドの説明では、次の表記規則が適用されます。

次のコマンドをコマンドラインインターフェースで実行して、結果を確認してください。

- コマンドラインに `-help` コマンド (`-h`) オプションだけを指定すると、コマンドラインの使用方法が出力されます。次に例を示します。

```
nbsqlite -h
```

- 角カッコ `[]` 中のコマンドラインの要素は、必要に応じて指定します。それ以外のパラメータは必須です。
- 斜体は、ユーザー指定による変数を示します。たとえば、ポリシー名とスケジュール名をバックアップ操作に指定します。

```
nbsqlite -o backup -S master_server_name -P policy_name -s  
schedule_name
```

NetBackup for SQLite のコマンドのオプション

表 A-1 に、`nbsqlite` 操作のオプションを示します。

表 A-1 nbsqlite コマンドのオプション

オプション	説明
<code>-C</code>	リダイレクトリストア用の NetBackup クライアントの名前を構成します。
<code>-d</code>	SQLite データベースパスを構成します。
<code>-h</code>	これが <code>nbsqlite</code> コマンドラインの唯一のオプションの場合は、ヘルプの使用方法を表示します。
<code>-id</code>	バックアップイメージ名を使用して、指定したバックアップを構成します。
<code>-o</code>	操作形式 (バックアップ、リストア、問い合わせ、削除) を構成します。
<code>-P</code>	DataStore ポリシーを構成します。
<code>-s</code>	NetBackup のスケジュールを構成します。
<code>-S</code>	NetBackup マスターサーバーを構成します。
<code>-t</code>	データをリストアするターゲットディレクトリを構成します。
<code>-z</code>	LVM のスナップショットサイズを構成します。

NetBackup for SQLite のコマンド

この付録では以下の項目について説明しています。

- [nbsqlite -o backup](#)
- [nbsqlite -o restore](#)
- [nbsqlite -o query](#)
- [nbsqlite -o delete](#)

nbsqlite -o backup

nbsqlite -o backup – NetBackup クライアントからバックアップ操作を実行します。

概要

```
nbsqlite -o backup
-S master_server_name
-P policy_name
-s schedule_name
(LVM) -z snapshot_size
[-d sqlite_db_path]
```

説明

このコマンドは、NetBackup DataStore のポリシー名とスケジュール形式を使用して、NetBackup クライアントからバックアップ操作を起動します。パラメータ `-s`、`-d`、`-P` は、Windows では必須パラメータです。パラメータ `-z` は、LVM ユーザーの必須パラメータです。

Windows の場合、ディレクトリパスは `install_path¥NBSQLiteAgent¥` です。

Linux システムの場合、ディレクトリパスは `/usr/NBSQLiteAgent/` です。

オプション

- `-d` SQLite データベースに接続するためのパスを構成します。
- `-P` NetBackup DataStore ポリシーの名前を構成します。
- `-s` NetBackup サーバー名を構成します。
- `-s` DataStore ポリシー用に構成したスケジュール名を指定します。
- `-z` (LVM バックアップ) LVM のスナップショットのサイズを指定します。

nbsqlite -o restore

nbsqlite -o restore – NetBackup サーバーからバックアップファイルをリストアします。

概要

```
nbsqlite -o restore  
-S master_server_name  
-t target_directory  
[-id db_backup_id]  
[-C NetBackup_client_name]
```

説明

nbsqlite コマンドは、-t および -s の必須パラメータを使用して、バックアップファイルをリストアします。-id と -c はオプションのパラメータです。

Windows システムでは、このコマンドへのディレクトリパスは install_path¥NBSQLiteAgent¥ です。

Linux システムでは、このコマンドへのディレクトリパスは /usr/NBSQLiteAgent/ です。

オプション

- c クライアント名を指定します。
- id
バックアップイメージの名前を指定します。
- s NetBackup サーバー名を構成します。
- t ターゲットディレクトリを指定します。

nbsqlite -o query

nbsqlite -o query – SQLite データベースに対して実行されるバックアップを問い合わせます。

概要

```
nbsqlite - o query  
-S master_server_name  
[-P policy_name]  
[-C client_name]
```

説明

nbsqlite -o query コマンドは、-s の必須パラメータと、-c および -p のオプションパラメータを使用してバックアップを取得します。

Windows システムでは、このコマンドへのディレクトリパスは `install_path¥NBSQLiteAgent¥` です。

Linux システムでは、このコマンドへのディレクトリパスは `/usr/NBSQLiteAgent/` です。

オプション

- c 指定したクライアントのすべてのバックアップを取得して一覧表示します。
- p 指定したポリシー名のすべてのバックアップを取得して一覧表示します。
- s NetBackup マスターサーバーを構成します。

nbsqlite -o delete

nbsqlite -o delete – NetBackup カタログファイルからバックアップ情報を削除します。

概要

```
nbsqlite - o delete  
-S master_server_name  
-id db_backup-id
```

説明

nbsqlite -o delete コマンドは、NetBackup カタログファイルからバックアップ情報を削除しますが、バックアップはストレージメディアに保持します。

パラメータ -s と -id は、必須パラメータです。

オプション

- id
バックアップイメージ名を使用して、バックアップを指定します。
- s NetBackup マスターサーバーを構成します。

記号

- インストール 9
- オプションパラメータ 14
- デフォルトのアプリケーションバックアップ 16
- デフォルトの場所 12
- バックアップ
 - LVM が構成されたシステム 19
 - バックアップイメージ 19
 - バックアップ情報 19
 - パラメータ 19
 - 削除 19
 - 検証 19
- バックアップスケジュール 14
- パッケージ 11
- プラットフォーム 10
- プラットフォームファイル 11
- ライセンス 8
- 優先度 14
- 前提条件 10
- 単一ファイル 7
- 操作 14

C

- CLIENT_NAME 14

D

- DataStore ポリシー 16
- DB_BACKUP_ID 14

L

- LOG_LEVEL 14
- LOG_SIZE 14

N

- nbsqlite.conf 7
- nbsqlite.conf ファイル
 - クライアント 14
 - コマンドライン 14
 - デフォルト 14
 - パラメータ 14

- 場所 14
- 定義済みの設定 14
- 必須パラメータ 14
- 構成 14

P

- POLICY_NAME 14

S

- SCHEDULE_NAME 14
- snapshot 7
- SNAPSHOT_SIZE 14
- SQLITE_TARGET_DIRECTORY 14